

# 国語

(時間 五十分)

## 【注意事項】

- 1、試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を開いて見 はいけません。
- 2、指示があつたら、解答用紙を問題冊子から取り出し、解答用紙の決められた欄らんに配られたシールをはりなさい。はり終わつたら、解答用紙をすみやかに問題冊子の中に戻もどしなさい。
- 3、試験開始の後、受験番号を問題冊子・解答用紙の決められた欄に、氏名を解答用紙の決められた欄に、それぞれ記入しなさい。
- 4、問題文には、原文(原作)の一部を省略したり、文字づかいや送りがないを改めたりしたところがあります。
- 5、答えは解答用紙の決められた箇所かしょに記入しなさい。
- 6、問題は十四ページあります。問題が抜ぬけている場合、印刷がはっきりしない場合は申し出なさい。
- 7、何か用事ができたときは、だまって手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。
- 8、試験終了の合図あひだがあつたら答えを書き続けてはいけません。すぐに筆記用具を置いて解答用紙の回収を待ちなさい。
- 9、問題冊子は持ち帰ってかまいません。

受験番号

受験番号





次の——線部①②③のカタカナの部分で、④・⑤の漢字の部分で、⑥・⑦の漢字の部分でひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

自分の意見を**メイジ**しない方がよいときもある。

**キヨウリ**に帰り、親兄弟と相談しようと思った。

そのニュースについての私の**シヨカン**を申し述べる。

政治家の責任を**ツイキユウ**する。

**ワコウド**の成長を見守る老人。

権力に**フワ**雷同する人、しない人。

正義と悪は**ヒヨウリ**一体なのだろうか。

小学校で習った**社会規範**に**ノット**る。

彼女の作戦が**奏功**する。

**蟬時雨**の季節にそうめんを食べる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

映画監督の祖父は「僕」を手伝わせ、五十五年前に撮った、役者「満さん」主演の映画の続編を撮ろうとしている。満さんの姉（光莉さん）と満さんの思い出の地である伊豆でのインタビューで、祖父は彼女に満さんの人柄について解釈を投げかけたが、彼女は「そうだったかもしれない」と曖昧な返事しかなかった。その夜、「僕」は満さんが残したノートを彼女から受け取り、その中身を知らされる。

光莉さんは瞼を閉じた。それから決意したように息を呑み、言った。

「弟は人生の多くを恨んでいました。たとえば、わたくしたち家族を。それに自身のたどってきた道行きを」

静かなため息が漏れた。冷たく、長い息だった。

彼女の言葉を、僕は理解しようとする。家族のもとを飛び出し、若い時期から大病に苦しみ、役者としてこれからというときにまた病を得て、命を落とした——それだけ並べれば、人生を恨んでいたとしてもなんらおかしくはなかった。

しかし、僕が祖父から聞かされていた満さんの心象はちがった。苦節から人間の機微を多く学び、演技の肥やしに変えたひと。ままならない過去をむしろ認めるためにこそ、役者という道を選び取ったひと。それが祖父の語る満さんだった。

「そのことを」

僕は迷いとともに口を開いた。

① 「そのことを祖父には伝えず、いま話してくださいのはどうしてですか」

答えの半分はわかっていた。光莉さんの言う道行きには当然、祖父とともに作った映画だって含まれているはずだった。

「それは」

光莉さんはすこしして言った。

「それはわたくし自身にも、説明のつかないことです」

彼女は視線を落とし、僕とのあいだの床のうえのあたりを眺める。

また沈黙が部屋を満たした。時間の感覚はもうほとんど失われていた。さきほどの沈黙とたっただけの沈黙と、どちらがどれだけの長さなのか、僕には見当がつかなかった。

光莉さんの手の甲をみる。濡れたシンクに張りついた薄いビニール袋のように、細かい皺が方々へと走っている。満さんの遺した言葉を彼女は家族の誰にも告げず、たったひとり痛みを抱えつつ生きてきた。祖父と僕はいまその傷を、映画のためといって掘り起こしていた。僕らが求めさえしなければ、彼女は痛みをどこかに埋めて隠したままで、その長い生涯を終えられたかもしれない。

やがて光莉さんはほとんど音を立てることなく、スツールから立ち上がった。そのまま窓際に向かつて歩いてゆくのを僕は目で追った。彼女はまぶたを閉じた。そして言葉を挟むべき継ぎ目を探すようにして、自分自身の呼吸に耳を傾けた。

「あの子のことを」

言葉と言葉のあいだには変わらず長い間があった。しかしその空白のうちにも、重い鎖を引くようにして光莉さんが言葉を継ごうとしているのがわかった。

「あの子のことを思い出そうとするとき、わたくしにはもう、あの子の苦痛しかみえません」

彼女がいつからか満さんのことをあの子と呼んでいることに、僕は気づく。

「ふいにあの子の笑顔や、何気なく過ごした時間がよみがえることはあります。でも、ほんの短いひとときです」

深く長いため息が彼女の口から漏れる。

「結局はそれらの思い出も、あの子の苦しみを想像するための、一本の薪のようになってしまふ」

彼女は落としていた視線を正面に向けて言う。

「わたくしにはもう、そのような目しかないんです」

彼女の瞳は濡れていた。まぶたのあいだから覗くほんのちいさな黒い広がり、彼女が向き合う窓の向こう、水平線の果てにまでいたる景色をまるごと抱えこんでいた。空も、海も、繁る木々も、すべてをひとつの色に変えてその瞳に浮かべていた。

彼女はその瞳を僕に向けた。やがて咳くように言った。

「ちがう目があの子に、注がれてほしい」

そのまま長い時が流れた。どれだけの長さだったか、やはり僕には測ることができなかった。彼女の顔にわずかに安堵が滲んでいるように僕は感じた。内心で苦痛をもたらすものの輪郭を、指で一周たどることができた。ほとんど無意味なそんな営みを、それでも終えたことへのむなしい安堵だった。

なにお伝えしたいのか、じぶんでもわからなくなってしまう。口もとに笑みのようなものをかたちづくって、彼女は言った。僕にはちいさく首を横に振ることしかできなかった。

時計に目をやると、時刻はすでに午前二時を過ぎていた。僕は遅くなってしまったことを詫びた。そうして部屋を出ようとしたとき、彼女は満さんの残したノートを僕に差し出した。

「お返ししたかなくてもかまいません」

きつぱりとした声音だった。

「監督さんにお見せするかどうかも、お任せします。読まずに捨ててしまってもかまいません」

表紙にはコーヒーかなにかのしみが細かく散っていた。角が丸まり、背表紙の上下が破れていた。そんな、捨てるだなんて。僕がそう口にする、彼女が言う。

「これを手放すべきときを、わたくしはずっと探していたのかもしれない」

彼女の手からノートを受け取る。頭を下げてから、もういちどまっすぐ光莉さんの目をみた。彼女は今まで明確な笑顔を浮かべていた。ドアを閉じる直前、彼女は言った。

「映画がうまくいきますように」

それから僕は祖父の眠る客室へともどり、寝巻に着替えるとすぐにベッドにはいった。祖父の軽いびきが響く暗闇のなかで、目をつむった。

翌朝そうそうに彼女の娘が迎えにきて、光莉さんは帰っていった。どうやら彼女は僕が部屋を訪れるまえか、あるいは早朝かに娘に電話をかけていたようだった。

お力になれず。彼女は申し訳なさに祖父に言って、深く頭を下げた。とんでもない、おかげさまでずいぶん捗ります。祖父は快活な声で言った。そうでしょうか？ 光莉さんが顔をあげて尋ねた。はい、そうですよ。祖父はそう返した。本当に？ 彼女はもう一度聞いた。ええ、本当に。光莉さんの手を握って、祖父は力強く言った。

前日に空を埋めていた雲はもう、かけらすら残さずどこかへと流れ去っていた。梅雨を目前にした貴重な陽光に目を細めながら、光莉さんと祖父は手を振りあって別れた。

紐のかかった何冊もの雑誌が祖父の書斎のまゝに置かれていたのは、さらにその翌朝のことだった。古紙回収の日がちかづくといつも、祖父はそのようにじぶんで雑誌をまとめた。映画雑誌に文芸誌、週刊誌、分厚いカタログ。それらのあいだに薄くて黒い背があるのを、なぜだか僕はほんの一瞥のうちにみつけることができた。白いビニールの紐をほどく。一冊のノートを抜き出して、僕は離れへと向かった。

伊豆高原からの帰り、浜辺に寄ることはしなかった。昼食のためサーブエリアに立ち寄り、家についたのは午後二時すぎだった。祖父は昼寝をした。僕は離れで机に向かい、ホテルで光莉さんが語ったそれほど多くはない話を書類にまとめた。夜なかに二人きりで話したことは加えなかった。

夕飯のあとで書斎にいる祖父を訪ね、それを渡した。ありがとうと呟く祖父は、書類に目を通すそぶりをみせなかった。これからどうしようか。そう尋ねようかと僕は悩んだ。しかし、祖父は疲れている。ホテルでみせたあの老いた瞳はそこにはない。それでも一泊の遠出をし、過去をたぐりよせようと思心をつらした、あたりまえに疲労した八十四歳の目を祖父はしていた。

「光莉さんは」

僕が書斎を出ようとしたとき、祖父が唐突に口を開いた。老眼鏡を外して、目頭のあたりを指で揉む。それから話をつづける。

「光莉さんは、思い出せないわけじゃないんだ」

祖父の言葉に僕は驚く。それはまさしく昨晩、光莉さんが僕に伝えたことだった。彼女の姿は僕に、遠い過去を克明に思い出すという行為について、その困難について教えているようだった。それは引き出しを開くようにはいかなかった。閉じた唇を開き、粘膜を掻きわけ、狭く深い奥底へと手指を押しこむこと。そして、そのようにして摺む記憶はかならずしも、望んだものとは限らない。角が立ち、歪なかたちをして、引き出す過程で激しい苦痛を伴う記憶であるかもしれない。どう答えるべきか、僕は考えを巡らせた。そして尋ねた。

「おじいちゃんには、それがわかるの？」

祖父が僕の目をまっすぐにみていた。その瞳にはデスクライトの蛍光灯が粒になって映っていた。冷たい光だった。

「わかる」

やがて祖父は言った。僕はなにかを口にしようとした。でも、もう話は終わりだということを知り、表情が告げていた。おやすみ。ちいさくそう言い交わして、僕は書斎をでた。

④ 祖父がなにもわかっていないほうがよかった。離れにつづく廊下を歩きながら、僕はおもった。光莉

さんが口を噤つぶんでいるなどは露つゆもおもわずにいてくれたら、そしてただ時間の流れのみを恨にくんでいてくれたらよかった。祖父の目のまえに横たわるのは重く痛ましい沈黙ではなく、うつろな忘却ぼうくわくであるとおもえていたほうが、ずっとよかった。

雑誌の束とともに捨てられようとしていたノートを手に、僕は離れの机につく。

祖父の家に身を寄せて以来、毎朝そうして机に向かうことにしていた。時に目を閉じて、時に目を開いて、自分自身の手のひらや離れのそとの狭い庭を眺めた。このさきじぶんがどのように身を振るべきかと、あてどなく考えを巡らせた。それは十分に終わることも、一時間になることもあった。はつきりとした考えを思いつけないまま、それでも意地を張るようにして椅子いすに座り、背を伸ばし、呼吸することをつづけた。

祖父のノートを僕は開いた。(五十五年前に届ける)。意味の曖昧なそのひと言だけが綴つづられた冒頭ぼうとうのページを、さらにめくる。まためくり、もういちどめくる。つぎ、またつぎとめくってゆく——想像していたとおりすべてのページがまったくの白紙であることを僕はたしかめる。

祖父が僕に語っていた構想や細々こまごまとしたアイデアは、どれもその場かぎりの思いつきにすぎなかったのだろうか？僕はしばしのあいだ考えを巡らせる。そしてノートによれた角に指さきを沿わせる。

白紙のノートに向かい、じっとペンを握ったままにいる祖父の姿が浮かぶ。表紙に記されている日付よりもはるか以前から、祖父はどのようにノートをまえにしつづけてきたのにちがいないと僕は想像する。祖父が実際に綴ることができたのは、冒頭のただひと言だけだった。しかし、あとほんのすこし背を押すものがあれば、祖父はもっとたくさんのことを書くことができたかもしれない。伊豆高原で携もっていたリュックサックを開き、光莉さんから預かったノートを取り出す。それを開くことはまだしていなかった。そこには満さんの過ごしたある年月が、みっしりと綴られているはずだった。

遠い過去に書かれた古いノートと、これから書かれるべきあたらしいノートがここにある。僕は二冊のノートをしばらくのあいだ預かっていることに決める。祖父がひとりで抱えるにはそれらはあまりに重たかった。痛ましい過去にじっと身を沈しずめるか、あるいは、ただまっさらな未来を思い描えがくか。どちらか一方だけを選べたなら、物事はもっと容易たやすくなるのかもしれない。

⑤ しかし祖父には、二冊がともに必要なのだと僕はおもう。重ねて置いた二冊のノートに手のひらを載せる。ちがう目があの子には注がれてほしい。光莉さんのその望みは、過去をつなぎとめながら、それでもあらたな視線を未来に注ぐことでしか、叶かなわないことだった。

(小池水音「二度目の海」による)

注 捨てられていたノートは、(2024年12月)という表紙で、祖父が映画の構想を記したのであろうノートである。

問一 — 部A・B・Cの意味としてもっとも適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 機微

ア 注意深く観察してわかる可能性

イ 表情に出るわずかな心情

ウ 容易には察せられない細やかな心理

エ 苦勞して得られる経験

B ままならない

ア 面白くはない

イ 認めたくはない

ウ 苦しい

エ 思い通りにならない

C 一瞥

ア 一回きりであること

イ ちらっと見ること

ウ いったん考えること

エ にらみつけること

問二 — 部①「答えの半分はわかっていた」とありますが、どういうことですか。その説明として

もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祖父の解釈は間違いだまちがと「僕」だけに伝えたのは、祖父への配慮はいりよのためとは思いつつ、「僕」が映画を作るべきだという光莉さんの意志を「僕」が確信しているということ。

イ 満さんの真実を「僕」だけに告白したのは、映画を撮った祖父に気を遣つかったためだとは分かつつ、何か他の理由もあるかもしれないと「僕」がいぶかしているということ。

ウ 満さんの暗い側面を「僕」だけに伝えたのは、彼が祖父を恨んでいた事実を祖父に聞かせたくなかったからだと分かつつ、そこまでする意図を「僕」がはかりかねているということ。

エ 満さんが人生を恨んでいたと「僕」だけに言ったのは、祖父の解釈を尊重したからだとは思いつつ、光莉さんの祖父への不信感に「僕」が薄々気づいているということ。

問三 — 部②「空も、海も、繁る木々も、すべてをひとつの色に変えてその瞳に浮かべていた」とありますが、ここからどのようなことがうかがえますか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 光莉さんは、弟との楽しい思い出すら彼の苦痛を想起させる材料になってしまったように、自分ではどうやっても弟の人生を一つの観点からしか解釈できなかつたということ。

イ 光莉さんは、自分が思い出せる弟の楽しそうな笑顔は実際には弟の苦しい人生を思い出したくないために生まれた虚像きやぞうに過ぎないと気づき、罪悪感に苦しんでいたということ。

ウ 光莉さんは、弟が辛い人生を歩んできた事実を一人で抱えこむことで、目に映る景色が全て均一な色に見えてしまうほどに彼のことしか考えられなくなり、弟に執着しやくちやくしているということ。

エ 光莉さんは、弟の笑顔や楽しかった思い出がその後彼の味わってきたであろう苦痛を想起させる材料になることを辛く思いつつも、一人で向き合おうと決意しているということ。

問四

——部③「むなしい安堵」とありますが、どのようなことに対してそう感じているのですか。次の空欄に当てはまるように十字以上二十字以内で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

という無意味な営みを終えたこと。

問五

——部④「祖父がなにもわかっていないほうがよかった」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 光莉さんの沈黙は、弟との思い出の辛さゆえであり、自分だけが彼女の辛さを分かっていたと思っていたが、実は祖父も分かっていたことに気づき、祖父が何も知らなければ自分が光莉さんの願いを叶えられたのにと残念がっている。

イ 光莉さんが満さんとの思い出を中々語らなかつたのは、辛い思い出を思い出させたためだと祖父は分かっており、純粹じゆんずいに映画を撮って楽しもうとしていた祖父の印象が人を傷つけてまで映画を作りたい自己中心の人物に変わり失望している。

ウ 光莉さんが口を噤しぼんでいたのは、忘れていたからではなく思い出す際に祖父が苦痛を与えていたからであり、それを分かっていた上で自分の解釈を押しつける祖父の傲慢ごうまんな一面を知りたくなかつたと思いつつ、祖父を嫌いになれないでいる。

エ 光莉さんの沈黙は、時の経過により単に忘れていたからではなく弟との記憶を思い出す時に苦痛を伴ったからであり、光莉さんの苦痛に満ちた記憶を自分が掘ほり起こしていたことに祖父が気づいて苦しんでいたことに胸を痛めている。

問六

——部⑤「しかし祖父には、二冊がともに必要なのだと僕はおもう」とありますが、このときの「僕」の気持ちをし十字以上八十字以内で説明しなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問七

この文章の内容と表現の特徴を説明したものととして適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「粘膜を掻きわけ、狭く深い奥底へと手指を押しこむ」という表現には、身体的な比喩ひゆが用いられており、記憶を掘り起こす困難や辛さやそれがもたらす痛みをまざまざと描いている。

イ 光莉さんが満さんのことを「弟」と呼んでいたのが、「あの子」と呼び方が変化しているのは、光莉さんの気持ちにより弟に近づき、当時の生々しい記憶に迫せまっていることを示している。

ウ 祖父と光莉さんが別れ際に感謝を述べあっている場面で「本当に」という言葉が繰り返されていくように、二人は映画の完成に本心から自信を持ち互たがいを励はげまし合っている。

エ 「僕」が祖父の家の離れに向かうまでに伊豆高原から帰宅した際の出来事が回想されることで、「僕」が二冊のノートを手にした際に感じていた祖父への思いがより鮮明せんめいに伝わっている。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

哺乳類は子どもの保護を強める方向に母親の身体と行動を進化させ、また霊長類はそれを手指によって行うように進化した。そのことは子どもに対して母親が対面して触れ合い、手で親和的に関わることを増加させた。それと同時に霊長類には、個体の自律性、すなわち個としての行動の自由度を高めるといふ方向の進化も指摘できた。こうしたことをふまえれば、ヒトは霊長類の中で最も子どもを保護する傾向が強く、かつ最も個の自由度が高い種となる。

しかしこのことは、個体としてのヒトの母親にとっては矛盾をはらんでいる。なぜなら、子どもの保護は、自身の他の行動を犠牲にして子どもに積極的に関わることを必要とし、それは母親が個体として自由にふるまうことを難しくするからである。そのことが子育ての困難の根本的な原因であり、子育てに悩むということは、ヒトならではの進化的宿命なのである。

ヒトの赤ちゃんは「生理的早産」、つまり本来生まれるべき時期よりも早く生まれることに由来する行動的な未熟さを特徴とする。ヒトは四足歩行をやめて直立二足歩行を行うことによつて、骨盤が変形するとともに、身体が支えるべき頭部（大脳）を大きく重くできた。それがヒトに難産と生理的早産をもたらしたのである。そのためヒトの新生児は、二次的就巢性（本来、離巢性の動物が二次的に就巢性の特徴をもつ）を備えることになり、そのことが「離れつつ守る」というヒト独特の育児スタイルを発達させた。

したがって、ヒトの赤ちゃんは這ったり歩いたりということはしばらく不可能な、寝たきりの状態である。また母親もその子どもを常時抱き運ぶということをしないので、母子はかなりの時間分離することになる。そのために家庭という安全な母子分離空間が必要となった。母子の結合を強めるといふ進化の方向性からすると、変則的な霊長類である。

▼接触するとしても、長時間にわたる場合は手でなく、スリングやベビーカーなどを使って運ぶ。もしくは他者に手渡す。つまり母親一人が自分の身体を用いて子どもを守るスタイルから、周りの多様なヒト・モノ資源を利用して子どもを守り、社会的子育てをするようになったのがヒトであるといえよう。結果として母子の安定した分離が実現されている。

養育者との身体接触を通じて安心が得られ、それをベースに子どもは母親から離れて外の世界を探索し、新たな可能性に挑戦できるようになる。こうした考え方は「アタッチメント（愛着）理論」と呼ばれ、ヒトの子育てや発達における重要な基礎として位置づけられている。しかし、実はヒトの母子は、本質的に出生の直後から分離的なのである。

かつての母親は献身的に家事や子育てに努めていたが、現在は女性の就労も増え、家庭で主婦としてばかりでなく、個人としてふるまうことが増えている。これは単に時代の変化というよりも、むしろ自律志向という本来の生物学的な背景が表面に表れたものである。

子どもを守ろうとすればするほど、母親の体力と時間は奪われる。保護をするということは母子が近づき合うことであるが、それは同時に母子が互いに相手から行動の制約を強いられることであり、そのことは高い自由度を求めると相容れない。子どもへの愛情と個の自由度は相反しジレンマを生む。哺乳類であり霊長類であるヒトはこのような矛盾が最大化している動物であつて、このことが本章の冒

頭に述べた育児のトレードオフに関係しているとともに、<sup>②</sup> ヒトの子育てに抜き差しならない困難をもたらしている根本原因でもある。女性の個人化という今日の傾向にはそういう生物学的背景がある。

このような特徴のため、ヒトの母親は子どもを守ろうとしつつ、離そうともする。分離しつつ守ることとは、矛盾的關係にある子どもの保護と母子の自由度を、ともに満足させる「妥協策」であった。これは、母子の愛着關係の重要性を指摘したアタッチメントの議論にはない視点であるが、ヒトの親子關係の基底をなす重要な認識であると私は考えている。▲

二次的就巢性という状態は、真の未熟ではない。目や耳は環境に対してしっかりと開かれて情報を取り込めるし、声や視線・表情、手足の動きなどを用いて周囲に発信もできる。もちろん自ら歩いたり、走って場所を移動したり、振りほどかれないように母親にしがみついたりすることはできない。しかしその代わりに周囲の状況を把握し、泣いて親を呼び、親から保護を引き出す能力は高い。子どもの顔つきや仕草のかわいらしさは、保護の解発刺激として、それへの敏感な反応を親に引き起こさせる。

ヒトの赤ちゃんがもつ高い認知能力は、たとえば顔という刺激に対する生まれつきの好みからみるとができる。また、身体の節々につけたマーカアの動きの映像だけをもとに、それが動く人であると識別する能力も備わっている。さらに、目の前でおとながする舌出しなどの表情を、自分の顔で模倣する能力などもあり、新生児に人刺激への高い視認能力があることが確認されている。しかも、胎内で聞いていた音刺激を出生直後から認識できるなど、聴覚的にも高い能力をもっている。

新生児は一見未熟ではあるが、先に確認したように、生命の出發時点からすでに本質的に能動的で主張的である。子どもの見かけ上の弱々しさに惑わされて、ともするとそういう子どもの強さが見失われがちである。いわゆるネズミの赤ん坊のような、目も耳も閉じている本来の就巢性の特徴とは明らかに異なっているのである。

ヒトは他の類人猿に比べて子どもが早期に離乳するが、性成熟は遅い。言いかえると子ども期が長い。それにもかかわらず、短い出産間隔で子どもを産むことのできる繁殖力の旺盛な霊長類である。

人類学者のK・L・クレイマーによれば、周囲の個体の協力的育児によってそれが可能になっているという。そのことは「子どもを保護する」「個として自由にふるまう」という、ヒトの母親の矛盾する志向性の解消とも深く関わっている。両親に代わる子育てをアロペアレンティングという。協力的育児と同義であるが、論点をより鮮明にするため「母子」を起点にして考えるという立場から、本書では前出の<sup>注7</sup>アロマザリングに注目する。

### (中略)

「家族」というアロマザリング集団を構成するということも、ヒトの子育ての大きな特徴である。ヒトは、家族と近隣という二重のアロマザリング・システムをもつ。近隣というのは環境の状態によるところが大きく不安定であるが、家族、特に最小単位としての核家族という基本ユニットは安定的な集団である。そして「家庭(家)」という構築環境が、その安定性を支えている。

心理学者の柏木恵子は、ヒトの寿命が伸びたことと少子化をヒトの人口動態上の大きな変化と位置づけ、このような人口革命が女性の生き方を大きく変容させたと指摘している。特に、前述したように女性の「個人化」の問題は、繁殖の重視から「個」として生きるのを優先することへの変化であると柏木はとらえる。そしてそれは子どもの存在を「ささがるもの」から「つくるもの」へと変化させるとい

う、子どものもつ価値の変化をともなっていると分析している。

ただし子どもは、単にそのような母親の子ども観に従属するのではなく、自らの動物的能力性によって母親によるコントロールに抗議や自己主張をし、それがしばしば母子間の衝突を引き起こす。それだけでなく、子どもは母親以外の身近なアロマザー（アロマザリングを行う者）にも自ら積極的に近づき、またその間を渡り歩くことで結果的に母親の自律性達成に協力する。そのアロマザーの最たるものが家族である。

家族の中でも特に父親という存在が長期安定的な関係として期待される。ところが、哺乳類の雄親は子育てに熱心ではないという一般的傾向をもっているとされる。（中略）

他にも祖父母やきょうだいアロマザリングの担い手の候補として存在しており、そういうメンバーの全体がヒトの家族を構成している。また家族の枠組みを超えた血縁個体、さらに非血縁の近隣集団や、保育士、教師、医師、看護師などの専門家によるサポートも、ヒトの母子が離れつつ守る子育てを實現するうえで欠くことができない。まさにヒトは重層的な協力的育児の発達した種である。

母親とアロマザー、あるいはアロマザー同士も、単に子どもとつながるだけではなく、相互に関わり合う機会をもつことになる。それらを近づけ関わり合いをもつように、子どもが能動的に導いているとみることもできる。複数のアロマザリングにおける移行の接続部分では、一時的におとなの保護が手薄になる瞬間があるし、また受け渡されるおとなの子どもに対する接し方も同じとはいえない。その場合は、そのつど子どもによる調整も必要となる。

協力的育児の発達しているヒトは、その移行において子どもがもつ柔軟な対応能力と、アロマザーを信頼し、安心して子どもを手渡す母親の遠心性とが発達した種でもある。（中略）

人間だけでなくモノも子育てに関与することは、ヒトの子育てを独自のものとしている点として強調しておきたい。ヒトの子どもは二次的就巢性ゆえにしがみつきは不得手だが、モノへの執着はとても強い。持ったり運んだりして遊ぶし、それを他者との間でやりとりすることで社会的相互交渉にも活用する。玩具はいうに及ばず、身の回りのモノを手当たり次第に弄ぶといつてもよい。手や口でモノに触れ続けるといふこの執着ぶりは、他の霊長類にはない性質で、そこにはヒト独特の「モノ本能」とでもいふべき強い志向性を指摘することができる。

#### （中略）

ヒトは直立二足歩行によって前肢が姿勢の保持機能から解放され、抱きに多用されるようになる。ともに、手指の操作性という霊長類の特技が飛躍的に発達した。さらに大脳が大型化することで、ヒトはさまざまな道具を作り出し、それを母子の身体間に介在させることによって子どもを守るとともに、母子の隔たりと自由度の増大を實現した。育児書や電話、テレビ、インターネットも有用な子育て道具である。

（根ヶ山光一『抱え込まない子育て——発達行動学から見る親子の葛藤』による）

注1 離巢性↳子どもが母親の体内にとどまる期間が長く、成熟して生まれてくるため、巣の中で親の保護を受けることがないという性質。

注2 就巢性↳子どもが母親の体内にとどまる期間が短く、未成熟で生まれてくるため、出生後も巣の

中で親の保護を受けるといふ性質。

注3 スリングは乳幼児を手を使わずに抱っこするための道具。

注4 ジレンマは相反する二つの事柄の間で板ばさみとなり、どちらとも決めかねる状態。

注5 本章の冒頭に述べた育児のトレードオフは子供が多い生物ほど保護が弱くなり、保護が強い生物ほど子供は少なくなるという法則。

注6 解発刺激はある本能的な行動を起こさせる刺激。

注7 アロマザリングは母親に代わる子育て。

注8 前肢は前足。人間では腕がこれにあたる。

問一 ——線部①「二次的就業性」とありますが、ヒトにおいて「巢」にあたるものは何ですか。本文の中からもつとも適切な二字の言葉を探し、抜き出して答えなさい。

問二 子育てに関して従来どのような考え方がなされてきたか、▼ ▲内から分かることを次のように説明したとき、空欄に入る言葉としてもつとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

子どもにとって、母親に対する  が重要である。

- ア 信頼
- イ 自立
- ウ 密着
- エ 隔絶

問三 ——線部②「ヒトの子育てに抜き差しならない困難をもたらしている」とありますが、どのような困難ですか。「哺乳類」、「霊長類」という言葉を使って、六十字以上七十字以内で答えなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

問四 ——線部③「本質的に能動的で主張的である」とありますが、どういうことですか。その説明としてもつとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ヒトの新生児が、優れた知覚能力を持つとともに、自身への保護を誘発するための行動をしているということ。
- イ ヒトの新生児が、親に頼りきりにならず、主体的に行動することで成長していく力を持っているということ。
- ウ ヒトの新生児が、外界の情報に強い関心をいっていると同時に、周囲に積極的に関わろうとすること。
- エ ヒトの新生児が、親からの影響を受けつつも親とは異なる個性を持っており、自身の意志で活動しているということ。

問五

- 線部④「女性の生き方を大きく変容させた」とありますが、女性の生き方はどう変わりましたか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 自身や夫の両親と別々に住むことにより、一人で子育てをするようになった。
  - イ 自身の自由との兼ね合いの中で、子どもを持つかどうか選ぶようになった。
  - ウ 男女平等の価値観と労働者不足のもとで、社会に出て働くようになった。
  - エ 以前よりも長く生きられるようになり、時間を持て余すようになった。

問六

——線部⑤「まさにヒトは重層的な協力的育児の発達した種である」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

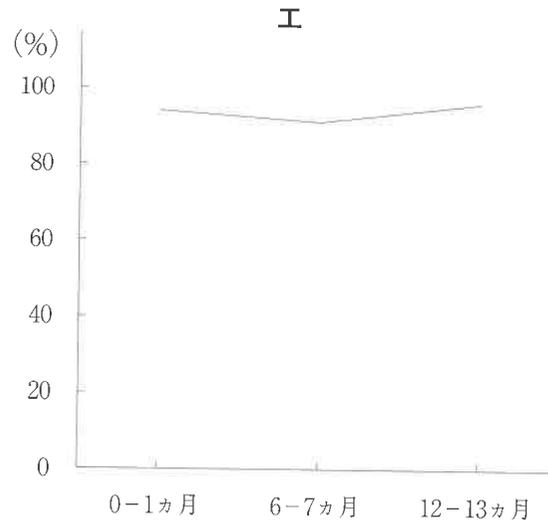
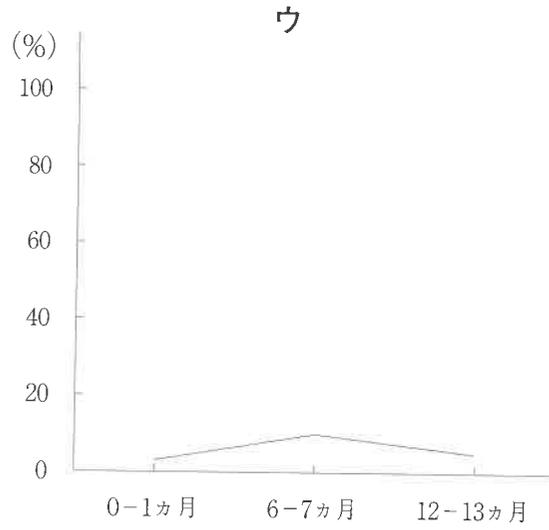
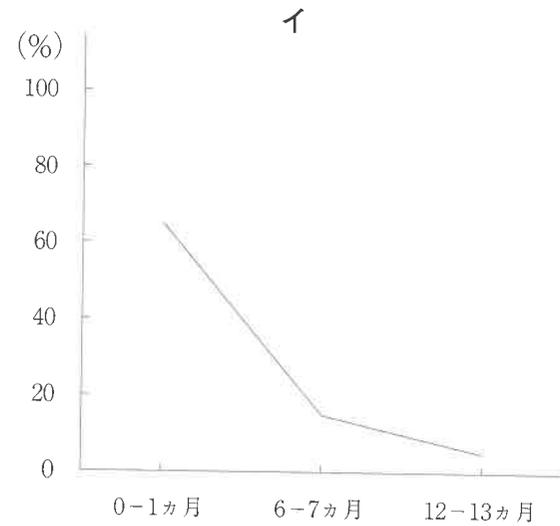
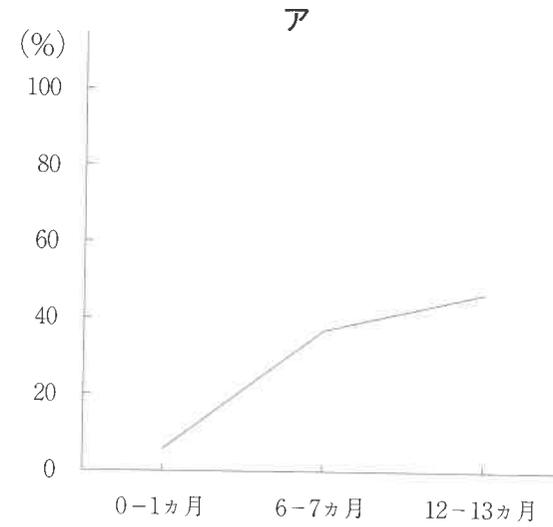
- ア ヒトは、母親や父親といった大人達によって子どもが育てられるというだけではなく、子ども自身が生まれながらに持つ学習能力によって成長してくのだということ。
- イ ヒトは、母親が子どもの保護を弱くしたとしても、母親以外にも様々な育児の担い手があり、子ども自身もそれらに働きかけることで保護がなされるということ。
- ウ ヒトは、一人の母親によって子育てを完結させるのではなく、前の世代から新しい世代へと子育ての知識や技術を受け継ぎ、発展させてきたということ。
- エ ヒトは、母親や家族に限らず多くの人々が助け合いながら子育てをすることによって、他者を思いやる気持ちの大切さを学ぶことができるということ。

問七

——線部⑥「母親の遠心性」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母親の、自身のやりたいことを我慢しようとするとする性質。
- イ 母親の、周りにいる人に対して疑いを持たない性質。
- ウ 母親の、今とは別の場所に行きたいと考える性質。
- エ 母親の、子どもの育児から離れようとする性質。

問八 最後の中略部分では、モノ遊びによって生じる母子の分離の時間の観察結果について説明されています。その観察の結果として、どのようなグラフが予想されますか。もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。なお、縦軸は母子が分離している時間の割合を表し、100%は常に分離した状態であるという意味、0%は分離している時間が全くないという意味になります。横軸は子どもの月齢を表しています。



(以下余白)





# 国語解答用紙

受験番号

氏名

※注意!! 解答欄は設問の順序通りにはなっていないところがありますので、まちがえないこと。

↓ここにシールをはってください↓

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
	⑦	③
	⑧	④
	る	

二

問一 A

B

C

問二

問三

問五

問七

問四

10

20

問六

70

80

三

問一

問二

問四

問五

問六

問七

問八

問三

70

60